

真
夜
中
の
サ
ク
ラ

小
林
ゆ
り

真
夜
中
の
サ
ク
ラ
小
林
ゆ
り

真夜中のサクラ

二〇〇四年二月二十五日 初版第一刷発行

著者

小林 ゆり

発行者

菊池 明郎

発行所

筑摩書房

東京都台東区蔵前二五二三 千一八一八七五五

振替〇〇一六〇八四二二三

印刷

株式会社精興社

製本

株式会社積信堂

小林 ゆり

一九七六年、埼玉県生まれ。大谷
大学文学部哲学科卒業。会社勤務
を経て二〇〇三年、第十九回太宰
治賞受賞。

ISBN4-480-80378-5 C0093 Printed in Japan

© YURI KOBAYASHI

乱丁・落丁の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

千三三二一八五〇七 さいたま市北区櫛引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八六五一〇〇五三

真夜中のサクラ

装丁 櫻井 浩 (©Design)
カバー写真 COLOR BOX

薄汚れ、タバコのヤニで黄色く変色している白い壁。六畳ほどの狭い部屋には化粧物のように化粧を施し、身体中にきらきらを塗りたくっているバカでかい男たちがいる。身体に吸い付くような黒のサテンのドレスに蛍光ピンクの羽マフラーをひらひらさせながらコンビニのおにぎりをほおばっている。ぶよぶよとしたふくよかな肢体に、穴の開いた金の小さなビキニの下着をつけて、その上に柄の大きい派手なアロハドレスを着ている。宇宙人をイメージしたシルバーの全身タイツのお尻と股間の部分にはなぜか蛍光灯が仕掛けられていて、足元のブーツの底は地上から三十センチもある。彼女たちの首から上は、見慣れた今では綺麗な顔ばかり。三重の付け睫毛でも、口紅

がラメまみれでも、ウィッグがおでこから一メートルあっても、みんな素敵。目立てば目立つほどスバラシイ。ダンスがうまけりやおよろし。ドラァグクイーンの世界はそういうもの。個性的であればあるほど拍手喝采を浴びるのだ。

私はその脇でメイクを済ませ、衣装も着替え、今日の私のショーのネタを仕込んでいるところ。

「やだあ、あんたマジでそれやるの？」

ハスキーな声。見上げるとそこには、今日のショーの主催者であるサマンサが立っていた。サマンサはこの世界では有名なクイーンで、テレビやマスコミの興味本位な取材を受けることが多く、十年位前からこの小さな地下クラブでドラァグクイーンのショーをやっている。

サマンサはクイーンにしては珍しくあまりお喋りをしない。下世話なことも口にしない。いやらしいことを言葉にのせることを本気で恥ずかしがる。たいがいクイーンたちは自らの性生活を下ネタまじりにでかい声でぺらぺら喋る。朝昼晩、夢の中でも喋る。そして、虚構にまみれている。自称デザイナーやアーティストなんて腐るほど

いる。でも、平日は地味なスーツを着た公務員であったり、自営業者だったりする。

ドラァグクイーンという名称はアメリカで発生した。簡単に要約すると「女装するゲイ」のことである。日本の「オカマ」とは異なる。クイーンたちはあくまでも「男を好きなオトコ」であり「女装する」ことも好きなのだ。ゆえに「オカマ」のように女と見紛うばかりの「女装」はしない。クイーンの「女装」は極めて過激で、化粧は果てしなく派手、服装は非現実的で常に「誰よりも美しく、誰よりも激しく」を目的としている。別に決まりがあるわけではないが、私が一年間クイーンをやってきて感じた感想である。彼女たちの衣装は、毎日が紅白歌合戦のようである。ショーは基本的に曲に合わせて「ロパク」によるダンスやパフォーマンスを行う。彼女たちの活動場所は主にゲイ中心に開かれているクラブや一般のクラブである。クラブといっても銀座のクラブのことではない。いわゆるディスコとライブハウスが融合したような、光の入らない狭い空間のことだ。

クイーンたちは、時には「エイズ防止パーティー」と銘打って、収入をエイズ募金

のために使用していることもある。エイズ問題はクイーンたちにとって国内外問わず、身近な問題なのだ。

クイーンは男の数が圧倒的だが、私のように女もいる。その場合レズビアンであることが多いが、私はノンケである。つまり私の欲望の対象は今のところ男だってこと。サマンサはこの小さなクラブのイベントで、月一回ショーをする。そして彼女は十年間一度も欠かさずに出演している。律儀なのだ。誰よりもこのイベントを大切にしているのも彼女だった。クイーンたちは夜の仕事や他のイベントを多くかけ持ちしているから、このショーイベントも急に無断で休む奴がいる。いい加減さも多いこの世界。サマンサの日々の生真面目さは、私のちいさな目には大きなトルマリン原石のように映った。減多にいない、貴重なひと。強い決心があるのだろう。だからこの世界のトップでいられるのだ。

サマンサはまぶた上下の付け睫毛を食虫植物のようにパクパクさせながら私を見下ろしている。今日の彼女の衣装は千鳥柄のタイトなロングワンピースだった。首からは直径一センチ位のイミテーションの黒真珠が蛇のように幾重にも巻きつき、垂れ下

がつている。スカートの下のブーツの底は二十センチ以上あるから、今の身長は二メートル程あるのではなからうか。ゲイのドラッグクイーンには背の高い奴が多い。実際、背も高く、顔もデカイ、横もデカイ、という奴がもてるかどうかは別にして一番舞台栄えがするのだ。私は背が低いから、私から見たら彼らは、未知の国の大木みたいに見えた。サマンサは痩せすぎだが背は高い。その姿から二十年前の、学ランを着ていた坊主頭のサマンサを思い描く。……全く想像ができない。

「今日の客入りはどう？」

私はサマンサの言葉には答えずに控え室の中から、ドア一枚挟んだ外の様子を窺った。ドアの隙間からはトランスミュージックやジャズが立て続けにスピーカーから流れ、コンクリートの床を重低音で打ち鳴らしている。私の足元にまで響いてくる。だんだん、興奮してくる。

「ちよっと寒くなってきたから客足が前より遅いみたい。でも十二時には満員よ、きつと」

サマンサの背後から、ラグビー選手に化粧を塗ってまぶしたようなハイジが、でか

顔をぬつと出して素っ頓狂な声を上げた。

「ちよつとー、DJの隣で踊ってるコ、けっこうかわいいわよ」

サマンサは「どれどれ」と言い、気だるそうにドアの隙間からその男を覗き見すると、「ダメダメ、あのコはあそこの不細工な女の連れよ。たまに見るけどノンケね」と言った。「ノンケ、なんて素敵な響き。だからイイんじゃないの！」と叫びハイジは身悶えした。

この世界に入って一年もたつと見慣れた風景だ。

こんな私は元・引っ込み思案で暗中模索だった陰気な女。

チラリとサマンサを見る。彼女が何か感じ取っているのではないか、と私の下腹部が微かに震えている。私の秘密にどこまで気付いているのか、能面のような彼女の表情からは何もわからない。

一年前、私はこの世界に安住の予感を得た。でも、私はこの世界から、私を立ち直らせてくれた人々から離れようとしている。空気のようにだった私の器を原色でうめつくしてくれたことにはとても感謝している。

でも、いろいろなことにも私は気付いてしまった。

私はショーの仕込みを続けた。

1

私は小さい頃、誰かの後ばかり追いかけている子だった。

学校は正直好きではなかった。小学校の時の成績表。「ふつう、ふつう、ふつう、……」特にその中でも大嫌いだったのが体育。

私は、二十七歳になった今もそうだが、太っている。ぽっちゃりしている。背は百五十センチあるか無いかだ。風船のような身体に短い手と足が取ってつけたように付いている。その姿はまるで、磔になった人間の形に張り合わせたポークソーセージみたいだ。「ハンバーグ」というあだ名を付けられたこともあった。そう、私の顔はまさに肉の塊のような顔だった。開いているのか、閉じているのかわからない、つぶら

な瞳。子豚のようにつぶれた鼻。小さなおちよぽ口。限りなく平面的な顔。果てしなく立体的な身体。小学校当時、純真無垢な少女だった私にとっては「最悪だ」と鏡を見て眩し絶望してしまうくらいひどい顔に見えた。おまけに太っている。性格も暗かった。

思い出すだけでも気分が悪くなってくる。小学五年のサッカーの授業。ただでさえ私は劣等感が強くて暗い性格だったのに、大嫌いな体育の、しかもさらに嫌いな連帯サッカー。私は「みんなで協力してガンバロウ」というサッカーとかバレーボールが嫌い。みんなって、いったい誰よ？ 得体の知れない奴らに何で値踏みされなきゃならないのよ、と今は思うことができる。そう、小学校の体育のサッカーなんていつも同じ子の間でパスをまわし合って、ちょっと運動神経のいい奴らが優越感を味わうための授業じゃないの。今の時代の小学校は知らない。私の過ごした初等義務教育はそうだった。「あいつにはパスしても大丈夫」とか「あいつにパスしたら終わりだ」なんていう無言の交信が行き交っていた。値踏みされるのだ。私のような女はボールをパスしている奴らの周りを申し訳なさそうにウロチョロするだけ。教師に「さぼって

「いせんよ」と表面上訴えるために。實際私にパスをまわそうとする奴はいない。でもボールには人格があるわけではないから私の方に飛んでくることもある。その時の、他の生徒から漂ってくる「あーあ、アイツにボールまわしちゃったよ」という諦めの空気。反面膨らむ周りの奴らの優越感。人一倍過敏であった私の神経はその雰囲気ですぐ読み取ってしまう。途端に私は誤ってオオカミの檻の中に迷い込んでしまったウサギのように恐怖で萎縮してしまう。そして私は奴らの期待通りにボールを取り損なうてラインの外にボールを逃がす。ある男子生徒が私に向かって怒鳴りつけた。「バカ！ 何してんだ、いい加減にしろよ」ヒステリックな声で私をがなりたてる。私は校庭の石ころのように言葉を失い、小さくなる。もう、いや。放っておいて。目頭が熱くなる。遥か遠くのコールキーパーの生徒からも視線を感じる。そこで教師が、もうやめろ、と静止した。でも、教師の声には「ダメな奴を責めても仕様がなし」という軽蔑と諦めのトーンが微かに含まれていることに私は気付き、のどの奥がぎゅうつと締め付けられるようなストレスを感じる。

子供なんて大嫌い。

奴らは無知という武器を後ろ盾に、強いと思わせた人物（たとえば教師、クラスのリーダー格の子供）にすぐ、付き従う。

暴力教師が私に目をつけ、私ばかりを一般家庭では放送できない言葉で罵ると、その周りの生徒たちは意味もわからずに、その嫌な言葉をオウムのように繰り返し、私に吐きつける。

子供は嫌い。その子供の無知を利用して要塞を作ろうとする教師も大嫌い。

キライ嫌い。みんなキライ。すぐ外見で判断する男が嫌い。私を手下のように従えようとする偽善に満ちた女が嫌い。

私は様々な劣等感を植え付けられ、ますます太り続けた。

私大を卒業して、しばらくブラブラして、父親のコネで小さな建築会社の事務職に就いた。毎日が会社と実家の往復だった。会社では経理を担当した。お昼ごはんは一人で食べた。親しい知人がいなかったのだ。コネで中途入社したので同期もいなかった。

た。

私はいつも、あらゆる話題の外にいた。外からこっそり耳を傾けて、こっそり話題に参加した。

「課長と営業の笹田さん不倫してるんだって」

へえ、そうなんだ、と思うが口にしない。

「戸口さんって、会長の愛人らしいよ。」

愛人。アイジン。カラオケみたい。

「おい。見たかよ、経理課の立花サクラ。あのデブ。もうはちきれそうじゃん。パンツの線がスカートに食い込んでさあ。それにあいつ暗いし、無表情だし、何考えてるんだかわかんねえよなあ」

私は考えた。少しでも目立つことをやめようと思った。むしろ地味すぎるほうだと思ふのだが陰口を叩かれるのは正直怖かった。私はみんなにとって無害な人間でいたかった。自分のことを悪く言われるのがたまらなく嫌だった。誰からも嫌われたくな

かった。この時の私はこれで精一杯だった。自信というものを持った記憶が無かった。忘れてしまっていただけなのかもしれない。

毎朝、けっして気分がいいとは言えない日でも、愛想良く挨拶するよう心がけた。雨の日でも、進んで外への買いものは自分がすると主張した。女の上司の執拗な、仕事に対する干渉にも「すみません」と繰り返し、彼女に従うようにした。三十代半ばの彼女は私をいちいち隣の薄暗い倉庫に連れて行き、流行遅れの化粧を施したアイメイクの奥から私をじっと見据えて言った。

「タチバナさん。私はあなたのためにを思っとう言っているの。そういうことをしちや駄目。どんな仕事でも笑顔で引き受けるようにしなさい。そうしないと誰もあなたに仕事を頼まなくなるわよ」

このひとは、私のためにここまで親身になって言ってくれているのだ、と本気で思っていた。疑問を抱きつつも信じ込もうとした。部下もバカなら、上司も馬鹿だ。女上司はその倉庫で暇を見つけては、妻子もちの小太りな営業の男と関係していたというのに。